文化 エンタ

タイガース 完全復活への道

5人の絆 ① 「たった4年、濃い4年」 沢田研二

1967年にデビューし、瞬く間にグループサウンズ（GS）の頂点に立ったザ・タイガース。そのオリジナルメンバーが12月、44年ぶりに再結成を遂げる。計8公演で全国を回る。完全復活への道のりと、社会現象とまでいわれた当時の人気と魅力を分析する。（文化部 清川仁、桜井学）

「5人全員の気持ちが一つになりました」。今年1月6日、沢田研二は東京・渋谷公会堂で開いたソロ公演で、タイガースの再結成を宣言した。ジュリーこと沢田（ボーカル）、サリー・岸部一徳（当時・岸部おさみ、ベース）、タロー・森本太郎（ギター）、ピー・瞳みのる（ドラムス）、トッポ・加橋かつみ（ギター、ボーカル）という結成メンバーが集うのは、69年の加橋の脱退以来のことだ。

＊グループの誕生

60年代後半、GSのグループが次々に登場した背景には、エレキギターのブームがある。タイガースも例外ではない。沢田を除く4人は京都の遊び仲間で、「サリーとプレイボーイズ」を結成し、ベンチャーズなどをコピーしていた。その後、ビートルズやローリング・ストーンズの日本での流行を受け、ボーカルとして誘ったのが、行きつけのダンスホールで演奏していたバンドの沢田だった。

「ファニーズ」として5人での活動になってからは、コンテスト優勝など実績を重ね、大阪のジャズ喫茶「ナンバ一番」に出演。新人バンドの登竜門といわれたこの店で、内田裕也ら音楽業界人から声をかけられ、デビューのきっかけをつかむ。

＊集った才能と楽曲

上京後、タイガースと命名したのは、当時フジテレビで「ザ・ヒットパレード」のディレクターをしていた、すぎやまこういちだった。スタジオで5人の演奏を見て、「『モンキーズ』などグループ名に動物の名前をつける風潮にならい、敏捷な動きと関西出身という理由から発案した」と語る。

すぎやまは作曲家としても、67年のデビュー曲「僕のマリー」をはじめ、「シーサイド・バウンド」「モナリザの微笑」「君だけに愛を」など、初期のヒット曲を手がける。クラシックの影響がにじむ流麗なサウンドは、「歌謡曲の世界の作家とは違うベースで作りたい」という意欲から生まれたものだ。

さらに、橋本淳による詞が、タイガースに〝王子様〟のイメージを定着させた。情に訴える歌謡曲の前例にとらわれず、児童文学作家の父を持つ影響もあって、「絵本の挿絵のようなつもりで詞を手がけていった」と橋本。「フランス人形」「モナリザ」などの言葉は、南仏を旅したことで引き出されたという。

5人の武器の一つは、コーラスの音域の広さだった。「沢田の中音部、加橋のテノール、岸部のバス。声質そのものも魅力的だった」（すぎやま）。他のGSとは違う清新さも、少女たちの心をつかんでいった。

＊頂点を極めた後

68年、人気は頂点に達する。「花の首飾り」でオリコン1位を獲得し、主演映画も上映、日本人初の武道館単独公演や後楽園球場でのライブも開いた。しかし、加橋が「カゴの鳥だった」と振り返るように自由がなく、多忙を極める中、メンバーの意思疎通もままならなくなる。加橋は69年に脱退。一徳の弟で米国から音楽の流行を伝えていたブレーン、四郎（シロー）が代わりに加入した。しかし、瞳も脱退の意思を明らかにし、71年にバンドは解散した。

メンバーは81年に再び集まり、「色つきの女でいてくれよ」などのヒットを飛ばした。だが、この時は瞳が不参加。引退して一切の連絡を絶っていた瞳を加えた完全復活は夢物語と思われていた。

＊ついに勢ぞろい

2008年、現役当時のマネジャーの中井国二（故人）が瞳の勤務先、慶応義塾高校を訪ねてから、話が動き出した。沢田、一徳、森本の3人が「ロング・グッバイ」という再会を呼びかける楽曲を作ったことなど、瞳はメンバーの思いを知り、同年12月に4人が再会を果たす。

11年秋、沢田が自身のツアーに、一徳、森本、瞳をゲストとして招く。瞳が表舞台に立ったのは、解散以来40年ぶりのことで、大きな話題を呼んだ。翌年1月24日、1971年に解散公演を開いた武道館には四郎も駆け付け、解散時のメンバー5人が41年ぶりにそろった。しかし、メンバーは物足りなさを感じていた。「かつみの高音がないと、タイガースやない」

加橋はツアーをめぐる考え方の相違から、参加を断っていた。そのため、沢田は、ツアーはあくまで自身のソロとして、タイガースの文言を使うことを避けた。加橋を含めて完全復活を目指す心づもりからだった。そして、加橋がリードボーカルを担った「花の首飾り」を、あえて歌った。それは「かつみの方がいいでしょ、という無言の問いかけだった」という。「今度は全員で」と沢田はファンに約束した。2012年3月、その約束通り、沢田は加橋に直接会って参加の合意を取り付けた。

メンバーボーカルであり、一番の人気者。解散後はソロとして「時の過ぎゆくままに」「勝手にしやがれ」など次々に大ヒットを飛ばし、日本レコード大賞、紅白歌合戦出場など、タイガースでは果たせなかった成功も収めた。それでも、あの頃の経験は、鮮烈な記憶として胸に刻まれている。「たった4年だけど、40年以上の歌手人生でめちゃくちゃ濃い4年間だった」

＊

お前が入ってくれたら、日本一になれると思うねん――。ファニーズ結成の際、誰かがそんなセリフで誘ってくれたことを覚えている。「本気で受け取ったわけではなかったけど、対等に接してくれる4人の存在がとてもうれしかった」

当時いたバンドは、目上のリーダーに半ば強引に誘われて参加。楽器の準備なども任せられ、客が少ない時にたまに歌わせてもらえる程度だった。当時の沢田について、森本は「アイビールックでそろえていた自分たちに比べ、かっこいいとも、歌が特別うまいとも思わなかった」と振り返る。

タイガース内でも、「隅っこに座っているタイプ」（一徳）で、意見を主張することはなかったという。過密なスケジュールや仕事内容に不満を漏らすメンバーもいる中で、「人の敷いたレールの上でベストを尽くせばいいと思っていた。遊ぶ時間がなくても、仕事が遊びより面白かった」。

どこか受け身であり続けた。タイガース解散後に参加したバンド、PYGが1年余りで解散しても、俳優に転じた萩原健一以外のメンバーによる「井上堯之バンド」にソロ活動を支えてもらうことにこだわった。加瀬邦彦、吉田建らのプロデュースに対しても、彼らの求める色に染まった。

その性格が「最近、ようやく治った」。復活に向け、最も力を尽くした。音楽活動のまとめとしての「終活」の一環ととらえ、「やるからには全員で」とこだわった。瞳の行きつけの居酒屋に偶然の出会いを求めて通い、加橋には頭を下げて説得した。「これができたら肩の荷が下ります」。屈託のない笑顔で語った。

◇

「5人の絆」では、再結集のメンバーのインタビューを連載します。次回は18日、加橋かつみの予定です。

＊松本剛撮影

オリジナルメンバーの森本太郎（左下）、瞳みのる（左上）、沢田研二（中央）、岸部一徳（右から2人目）、加橋かつみ（右端）

1965年 サリーとプレイボーイズ結成
後に、沢田研二を加えファニーズとして活動
67年 タイガースとして「僕のマリー」でデビュー
68年 主演映画「世界はボクらを待っている」
日本人初の武道館単独ライブ
日本初のスタジアムライブ（後楽園球場）
69年 加橋かつみ脱退。岸部四郎加入
71年 1月24日、武道館「ビューティフル・コンサート」を最後に解散
77年 沢田が「勝手にしやがれ」でレコード大賞
81年 タイガースとして2年間の限定復活
2008年 沢田、森本、岸部一徳の3人が作った瞳へのメッセージソングをNHK「SONGS」で沢田が歌う。12月、4人が約38年ぶりの再会
11年 沢田のツアーに瞳、森本、一徳が参加。38か所で9万人動員
12年 沢田の武道館ライブに四郎も駆け付け、解散時のメンバーがそろう
13年 1月6日、沢田がライブで結成時のメンバーでのタイガース復活を宣言

44年ぶり 結成時のメンバー集結

【12月開催の公演日程】
3日 日本武道館
8日 長崎ブリックホール
10日 福岡サンパレス
13日 名古屋センチュリーホール
17日 京セラドーム
20日 仙台サンプラザ
22日 札幌ニトリ文化ホール
27日 東京ドーム

岸部四郎も喜ぶ

骨折のリハビリ中の岸部四郎＝写真＝は、オリジナルメンバーのコンサートの知らせを受けて、「良かったと思う。毎年やってもいいんじゃないかなあ。やってほしいなあ……」と話した。